

児童の内発的動機づけと被養育態度の関連 ——愛情の高さに注目して——

加藤 孝士・大谷 哲朗¹⁾

Relationship between Intrinsic Motivation of Children and Caregiving of Caregivers.

Takashi KATOH and Tetsuro OHTANI

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the relationship between intrinsic motivation of children and caregiving of caregivers. Study subjects were fifth and sixth grade elementary school students. The result, high affection and low control were shown to be related with high intrinsic motivation. Furthermore, the possibility that high affection adversely affected “achievement” was suggested. Thus, it was shown that high affection was not always good for intrinsic motivation.

KEYWORDS : Intrinsic Motivation, Caregiving of Caregivers, affection, control

本研究では、児童の学習に対する「内発的動機づけ (intrinsic motivation)」について検討する。動機づけとは行動を行う時のやる気を指し、モチベーションという言葉は一般的にも広く使われている。この動機づけは何かしようとするエネルギーが有るのか無いのかで大きく分類することができる。エネルギーの無い状態のことを「無気力」といい、何もしたくない状態を指す。更に内的なエネルギーがある状態は、自発性の部分によって「外発的動機づけ (extrinsic motivation)」と「内発的動機づけ」に分類される。「外発的動機づけ」とは、「おもちゃを買ってもらうために勉強する」といったように、まわりの人からの働きかけによってエネルギーを持つ動機づけを指し、自発性の無い動機づけといえる。一方、「内発的動機づけ」とは「勉強が楽しくて勉強する」といったように、自らの意思によって学習していく状態のことを指し、報酬の無い状態でも自分の好奇心でエネルギーを持つ動機づけを指す。この分類に基づく、「内発的動機づけ」は「能動的に学んでいくこと」と同義といえる。

そもそも人間は「内発的動機づけ」を強く持っている。これは言葉をおぼえたての幼児によくみられる「どうして?」「どうなっているの?」といって、自分にわからないことを自ら学習しようとする場面

からも伺える。この場合は、何も報酬があるわけではないが、次から次へと質問を繰り返して、自ら学習していく。ところが、桜井・高野 (1985) や鹿毛 (1994) は、独力で課題を成し遂げようとする傾向が、加齢に伴って減少していくと主張している。つまり「内発的動機づけ」の弱まりを食い止め、向上へとつなげていくことは、教育の大きなテーマとなる。

内発的動機づけの変化に影響を与える要因として外的報酬が注目され多くの研究が行なわれている (Deci, 1971; 桜井, 1984a)。まず、内発的動機づけと外的報酬の関係として注目されたのは、外的報酬が内発的動機づけを低減させるという「抑制効果 (undermining effect)」である。抑制効果を主張する研究では、外的報酬の予期が後の内発的動機づけを低減させることを示唆している (Deci, 1971)。一方で、外的報酬が内発的動機づけを高める「促進効果 (enhancing effect)」も主張されている (McLoyd, 1979)。促進効果を主張する研究では、もともと興味の高い課題への外的報酬は抑制効果を持つものに対して、もともと興味の低い課題に対して外的報酬を与えることで内発的動機づけが高まり、促進効果がみられたことを指摘している (McLoyd, 1979; 鹿毛, 1994)。このように外的

報酬は内発的動機づけを規定する上で、非常に重要な影響を与えていることが示されている。

これらの内発的動機づけの変化メカニズムを統合するために、Deci(1975)は認知的評価理論(cognitive evaluation theory)を提唱した。この理論は、外的報酬が内発的動機づけに影響を与える2つの道筋を仮定している。1つ目は外的報酬が与えられることによって、「自らの意思で行動を行っているんだ」という自己決定感が低くなることによって内発的動機づけが低下するという制御的側面である。もう1つは外的報酬の情報(価値)によって児童の有能さに対する知覚を高めるのなら内発的動機づけは高まり、有能さに対する知覚を低くするのであれば、内発的動機づけは低下するという情動的側面である。そしてこれ以後、認知的評価理論を中心に内発的動機づけ研究が展開するようになった(詳しくは鹿毛, 1994)。更に桜井(1984a)は、認知的評価理論にWeiner(1979)らの達成動機づけの枠組みを取り入れ、刺激→認知→感情→動機づけ→行動という系列を想定した、自己評価的動機づけモデル(Self Evaluative Motivation Model:以下SEMモデル)を提唱した(図1)。このモデルにおいて、外的報酬の持つ制御的側面は、動機づけの評価→自己決定感(他者決定感)→自己決定への欲求→学習行動という過程を通り、外的報酬が持つ情動的側面は、有

能さの評価→有能感(無能感)→有能さへの欲求→学習行動という過程を通ることが設定されている(桜井, 1984a)。そしてこれらのモデルはある程度の相互作用は考えられるものの、かなり独立していることを主張している。そして、このモデルを検証するために一連の研究が行なわれ、SEMモデルを支持する結果が得られている(桜井, 1984a; 1987; 1990)。

そして、桜井(1988)は、外的報酬を与える人物として養育者に注目し、児童の内発的動機づけと養育態度の関係を検討している。結果、「子どもへの愛情欠如などの、子どもに対する否定的な態度(無視型な養育態度)」, 「子どもに対して過度な支配力を持つ親が絶対の権力で統制しようとする態度(独裁的な養育態度)」と子どもの内発的動機づけとの間に有意な相関がみられた。このことは、養育者の否定的な養育態度によって有能感が、統制の強い養育態度によって自己決定感が低くなることを示している。一方で、「溺愛を意味する養育態度」と子どもの内発的動機づけの間には有意な相関は示されなかった。しかし、桜井(1997)においては「賞を頻繁に与えることは内発的動機づけを育てることに關しては、弊害となる」と指摘されており、過度の愛情は、子どもへの過干渉(外的報酬の与えすぎ)にも繋がり、内発的動機づけを低下させる恐れがあると予測される。更に、桜井(1988)の調査の行われた1984年以降、少子化が進み子育てや、家族に対する意識も大きく変化してきており(国立社会保障・人口問題研究所, 2005)、児童と養育者の関係にも変化が現れている。特に、少子化によって養育者の子どもへの過保護や過干渉が問題となることも多く(平山, 2002; 岸田, 2002)、内発的動機づけを低下させる可能性の高い、外的報酬の与えすぎといった危険要因が増加した可能性もある。

そこで、本研究では児童の内発的動機づけと、養育態度の関係を改めて検討し、現代における養育態度と子どもの自ら学ぶ意欲の関係を検討することを目的として行った。

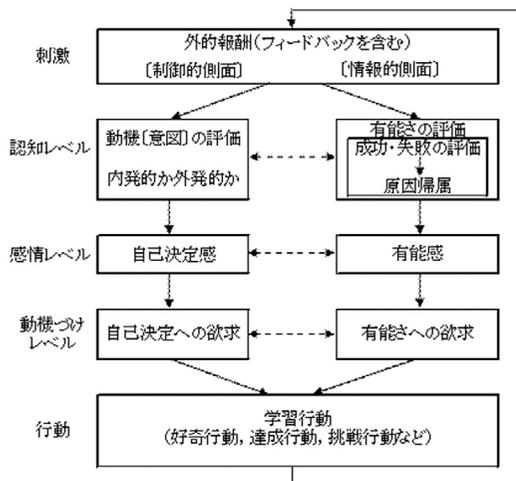


図1 自己評価的動機づけ (SEM) モデル (桜井, 1984を基に作図)

方法

調査協力者

広島市内の公立小学校の5・6年生212名対象に調査を行ない、記入漏れなどを除いた195名（5年生男子49名、女子43名；6年生男子55名、女子48名）の回答を本分析に使用した（回答率91.1%）。

手続き

質問紙は、教室にて学級担任により配布され、教示を読み上げた後に一斉に記入を求めた。調査対象者の児童には、回答は成績とは関係ないこと、統計的に処理されること、強制ではないことを質問紙に明記したうえ、調査者にも口頭で教示のうえ回答を求めた。

倫理的配慮

事前に学校長に調査計画を提出の上、調査許可をいただいた。また、調査用紙の作成段階で学級担任3名より意見をいただき質問紙の項目内容について問題がないか確認を求めた。質問紙完成後は、再び学校長から許可を取り、調査を行った。

調査内容

内発的—外発的動機づけ測定尺度 桜井・高野（1985）で作成された尺度を基に、調査協力小学校の教員3名と心理学の教授、筆者の計5名で協議の上、理解しやすいように文章を修正したものを使用した。下位尺度は、「知的好奇心（curiosity）」「認知された因果律の所在（perceived locus of causality）：以下因果律」「達成（mastery）」「内生的—外生的帰属（endogenous-exogenous attribution）：以下帰属」「挑戦（challenge）」「楽しさ（enjoyment）」の6つであった。6つの下位尺度ごとに、4項目計24項目から構成されている。回答形式は2つの選択肢（例、内発的質問；色々なことを、進んで勉強したいと思いますか、外発的質問；先生が教えていることだけ勉強すればいいと思いますか）から自分に該当すると思われるほうを選択する強制選択法で行った。内発的動機づけの質問に対して印をつけた場合

は「1点」とし、外発的動機づけの質問に対して印をつけた場合は「0点」として得点とし、合計したものを内発的動機づけ得点とした。よって点数が高いほど内発的動機づけ傾向が高いといえる。

表1 内発的動機づけ尺度の質問項目

知的好奇心	できるだけ多くのことを勉強したいと思います
因果律達成	自分がやりたいので勉強します 問題がむずかしくても、自分の力でやれるところまでやってみようと思います
帰属挑戦	好きなことが分かるので、勉強します あたまをつかう、むずかしい問題のほうが好きです
楽しさ	新しいことを勉強することは楽しいです

注) ここでは例として内発的動機づけの質問項目を挙げている。

被養育態度の測定尺度 質問紙の作成にあたっては、鈴木・松田・永田・植村（1985）によって作成された愛情尺度（例；あなたのなやみや心配事を分かってくれる事がある）、統制尺度（例；あなたに決まりごとをたくさん決めて、注意する事がある）を基に調査小学校の教員3名と筆者の計4名で協議の上、理解しやすいように文章を修正し、使用した。「愛情」、「統制」の各次元の尺度ごとに8項目ずつの計16項目で構成されている。回答は「よくある（4点）」「たまにある（3点）」「あまりない（2点）」「ほとんどない（1点）」の4段階で回答を求め、下位尺度ごとの平均得点をそれぞれ「愛情得点」、「統制得点」とした。愛情得点が高いほど養育者からの愛情が強いことを意味し、統制得点が高くなるほど養育者からの統制が強いことを意味している。また、児童の養育に関わっている人物は、両親だけとは限定できないため、本研究では「あなたの生活の世話を一番してくれる家の人は誰ですか？」という質問をし、その人物に関して質問に答えてもらった。

Symonds（1937）の親子関係理論では、「拒否（rejection）」および「過保護（overprotection）」を両端とするX軸と、「支配（dominant）」および「服従（submissive）」を両端とするY軸との直交

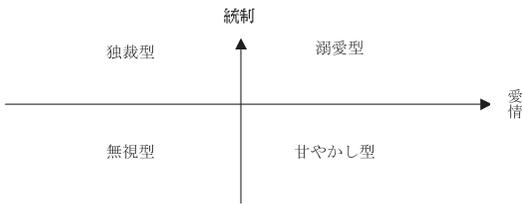


図2 養育態度の分類

する座標のどこに位置するかによって、「無視型」、「独裁型」、「甘やかし型」、「溺愛型」という4つの養育態度に分類している。モデルの概要は図2に示した。本研究で使用した尺度では、愛情尺度が拒否、過保護を両端とするX軸を、統制尺度が支配、服従を両端とするY軸を意味している。

結果

尺度の検討

本研究で使用した、「内発的動機づけ尺度」、「養育態度測定尺度」は、小学校教員3名と協議の上、本研究の対象者に分かりやすいように質問紙を修正し使用した。そのため、既存の尺度の構造が保たれているのかに疑問が残る。そこで、各尺度の作成方法に準じてAmos (Ver, 5.0) を用い確証的因子分析を行った。

豊田 (1998) にしたがって各尺度の構造を検討した。まず内発的動機づけ尺度では、GFIは.92 (.90以上が採用基準)と高い値を示し、またAGFIも.89

と高い値を示した。更に、RMSEAは.01 (.10以下の値を採用基準)と十分な値を示した。また、CFIも.99 (.90以上が採用基準)と高い値を示した。したがって、本研究で使用した尺度は、桜井・高野 (1985) の尺度と同様の構造を示していることが証明された。

次に養育態度尺度において、GFIは.95と高い値を示し、またAGFIも.93と高い値を示した。更に、RMSEAは.01と十分な値を示し、CFIも.99と高い値であった。したがって、本研究で使用した尺度は、鈴木・松田・永田・植村 (1985) の尺度と同様の構造を示していることが証明された。

更に、各尺度の下位因子ごとに α 係数を算出した。なお、これ以後の分析にはSPSS (11.0J) を用いた。結果、「知的好奇心 ($\alpha=.59$)」「因果律 ($\alpha=.79$)」「達成 ($\alpha=.71$)」「帰属 ($\alpha=.74$)」「挑戦 ($\alpha=.79$)」「楽しさ ($\alpha=.60$)」「愛情 ($\alpha=.82$)」「統制 ($\alpha=.73$)」とどの尺度も分析に耐えうる信頼性を有していることが示された。

下位尺度得点の検討

次に各下位尺度得点が、学年、性別による違いがみられないかを検討するために、内発的動機づけ得点、及び養育態度得点を従属変数とし、学年と性別を独立変数とする2×2の分散分析を行った(表2)。結果いずれの下位尺度得点においても、学年による有意な主効果及び交互作用はみられなかった。よっ

表2 学年・性別における各因子得点と標準偏差

	学年 性別	5年生		6年生		主効果 ¹⁾		交互作用 ¹⁾
		男子(N=49)	女子(N=43)	男子(N=55)	女子(N=48)	学年	性別	
内 発 的 動 機	好奇心	2.65(1.01)	2.44(1.47)	2.40(1.21)	2.81(1.23)	0.11	0.32	3.10
	因果律	2.39(1.44)	2.37(1.66)	2.16(1.54)	2.73(1.30)	0.10	1.65	1.85
	達成	3.02(1.25)	2.70(1.35)	2.95(1.37)	2.65(1.34)	0.11	2.65	0.00
	帰属	2.02(1.48)	1.84(1.53)	1.53(1.41)	1.88(1.42)	1.18	0.15	1.60
	挑戦	2.84(1.36)	1.81(1.61)	2.27(1.48)	1.92(1.43)	1.19	10.67**	2.49
	楽しさ	3.06(1.03)	2.56(1.42)	2.87(0.88)	3.10(1.21)	1.20	0.69	3.77
養 育	愛情	2.94(0.70)	3.06(0.65)	2.79(0.68)	3.15(0.66)	0.09	6.18*	1.51
	統制	2.55(0.67)	2.55(0.74)	2.51(0.71)	2.34(0.69)	1.52	0.78	0.74

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

¹⁾F 値

て、本研究では学年差を想定せず後の分析を行った。一方、性別では「挑戦」,「愛情」の各因子において有意な主効果がみられた。したがって、性別においては、異なる性質を保有している可能性があることから、男女別に分析を進めた。

養育態度の分類

続いて、養育態度と内発的動機づけの関連を検討するため、愛情 (M=2.97, SD=0.68), 統制 (M=2.48, SD=0.70) の平均得点を基に因子ごとに高群低群に分類した。Symonds の養育態度の分類に当てはめると、愛情得点が高群でなおかつ統制得点が高群であれば溺愛型に、愛情得点が高群でなおかつ統制得点が低群であれば甘やかし型に、愛情得点が低群でなおかつ統制得点が低群であれば無視型に、愛情得点が低群でなおかつ統制得点が高群であれば独裁型の養育態度といえる。男女別の養育態度分布は表3に示した。

養育態度と内発的動機づけの関連

次に、男女別に養育態度と内発的動機づけの関連を検討する。本研究では、図1や表3で挙げた養育態度の分類を意図しているが、愛情、統制の各因子の主効果の検定を行うため、内発的動機づけ得点を従属変数とし、愛情と統制の高低群を独立変数とする2×2の分散分析を行った。

1) 女子における養育態度と内発的動機づけの関連

まず女子の検討結果を表4に示した。これによると「挑戦」「楽しさ」において愛情の有意な主効果がみられた。具体的には、愛情高群の児童は低群の児童に比べ「挑戦」「楽しさ」得点が高く、内発的動機づけ傾向が高いことが示された。また、「因果律」「達成」「帰属」においては、統制の有意な主効果がみられた。具体的には統制低群の児童は高群の児童に比べ、「因果律」「達成」「帰属」の得点が高く内発的動機づけ傾向が高いことが示された。

表3 養育態度分類

愛情	低群		高群		
	統制	低群	高群	低群	高群
養育態度	無視型	独裁型	甘やかし型	溺愛型	
女子	13	18	35	25	
男子	26	27	21	30	

表4 女子の養育態度ごとの内発的動機づけ得点 (SD), 及び分析結果

愛情	低群		高群		分散分析の結果 ¹⁾		
	統制	低群	高群	低群	高群	主効果	交互作用
養育態度	無視型	独裁型	甘やかし型	溺愛型	愛情	統制	
知的好奇心	2.69(1.49)	2.17(1.34)	2.77(1.29)	2.76(1.39)	1.22	0.78	0.72
因果律	2.54(1.71)	1.94(1.59)	3.06(1.21)	2.32(1.49)	1.91	4.22*	0.05
達成	3.08(1.12)	1.83(1.38)	2.89(1.32)	2.76(1.27)	1.61	5.58*	3.72
帰属	2.00(1.29)	1.06(1.21)	2.37(1.55)	1.64(1.35)	2.31	7.11**	0.11
挑戦	1.46(1.61)	1.22(1.40)	2.00(1.48)	2.36(1.44)	6.46*	0.03	0.83
楽しさ	2.23(1.54)	2.22(1.48)	3.17(1.15)	3.16(1.14)	10.77**	0.00	0.00

** $p < .01$, * $p < .05$

¹⁾F 値

表5 男子の養育態度ごとの内発的動機づけ得点 (SD), 及び分析結果

愛情	低群		高群		分散分析の結果 ¹⁾		
	統制	低群	高群	低群	高群	主効果 交互作用	
養育態度	無視型	独裁型	甘やかし型	溺愛型	愛情	統制	
知的好奇心	2.31(1.19)	2.33(1.30)	2.67(1.15)	2.77(0.81)	3.20	0.08	0.03
因果律	2.15(1.46)	2.26(1.68)	2.62(1.36)	2.13(1.46)	0.33	0.41	0.99
達成	3.35(1.26)	3.15(1.20)	2.71(1.42)	2.70(1.32)	4.44*	0.17	0.13
帰属	1.92(1.60)	1.74(1.58)	2.14(1.42)	1.37(1.19)	0.07	2.79	1.07
挑戦	2.85(1.54)	2.33(1.62)	2.29(1.38)	2.63(1.25)	0.21	0.08	2.25
楽しさ	2.96(0.82)	2.56(1.01)	2.90(1.09)	3.37(0.76)	4.31*	0.02	5.70**

** $p < .01$, * $p < .05$

¹⁾F 値

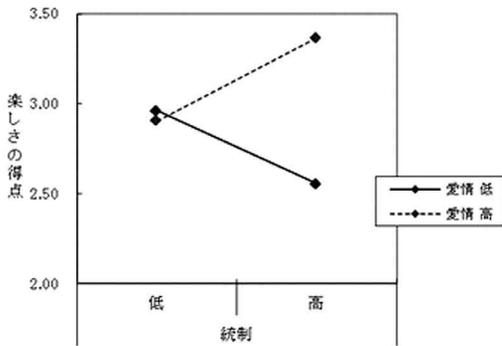


図3 養育態度と楽しさの関係

2) 男子における養育態度と内発的動機づけの関連

次に男子の検定結果を表5に示した。これによると「達成」「楽しさ」において、愛情の有意な主効果がみられた。具体的には、愛情低群の児童は高群の児童に比べ「達成」の得点が高く、内発的動機づけ傾向が高いことが示された。更に、楽しさにおいては、交互作用も有意であった(図3)。そこで、Bonferroniの単純主効果の検定を行った。結果、楽しさの得点は、統制高群において、愛情の高低間

に有意な単純主効果がみられた ($F(1, 100) = 11.07, p < .001$)。具体的には、統制が高い児童の場合、愛情が高い児童は、低い児童に比べ、楽しさの得点が高いことが示された。よって、溺愛型の養育態度(統制・愛情共に高群)の児童は、独裁型(統制は高群、愛情は低群)の児童に比べ楽しさを強く感じていることが示された。

3) 養育態度と内発的動機づけの相関係数

更に、内発的動機づけと養育態度の関係を詳しく検討するため、両得点の相関係数を男女別に算出した(表6)。結果、女子の内発的動機づけ得点は愛情得点と正の相関が、統制得点と負の相関がみられた。このことは、愛情が高いほど、及び統制が低いほど内発的動機づけ傾向が高くなることを意味している。一方で、男子は動機づけと養育態度の間に有意な相関はみられなかった。

4) 「愛情」と「達成」の関係の検討

分散分析の結果では、男子の「達成」において「愛

表6 男女別の養育態度と動機づけの相関係数

		好奇心	因果律	達成	帰属	挑戦	楽しさ
女子	愛情	.23*	.32**	.26*	.31**	.32**	.43***
	統制	-.08	-.28**	-.23*	-.30**	-.00	-.12
男子	愛情	.15	.05	-.07	.06	-.03	.16
	統制	.05	-.08	-.11	-.15	-.03	.05

** $p < .01$, * $p < .05$

情」の主効果がみられ愛情低群の児童は高群の児童に比べ内発的動機づけ傾向が高いことが示されたが、相関係数を算出したところ、 -0.07 と非常に低い値を示した。したがって、愛情の高さと内発的動機づけの低さが関係するといった単純な関係ではないことが伺えた。そこで、「愛情」と「達成」の関係をより細かく検討するために、男子の愛情高低群ごとに、愛情得点と達成得点の相関係数を算出した。結果、愛情得点低群において、愛情得点と達成得点に正の相関がみられた ($r = .37, p < .01$)。したがって、愛情低群においては、愛情が高いほど内発的動機づけ傾向が高くなることが示された。一方、愛情高群では、愛情得点と達成得点間に有意な相関はみられなかった ($r = -.08, n.s.$)。よって、愛情の低さが内発的動機づけ傾向を増加させるのではなく、高い愛情といった偏った関わりが「達成」傾向を減少させることが伺えた。

考 察

女子における養育態度と内発的動機づけの関係

まず女子において、愛情高群の児童は低群の児童に比べ「挑戦」「楽しさ」という内発的動機づけ傾向が高いことが示された。この理由として、養育者から強い愛情を与えられていると感じている児童は、桜井 (1984a) や碓井 (1992) において内発的動機づけを支えているもの一つとされる「有能感 (sense of competence)」を高く持つためと考えられる。有能感とは「自分は勉強ができるんだ」といったように自分自身に能力があると考える感情であり、桜井 (1984) の SEM モデルの情動的側面の感情部分に位置している。愛情が強い状態、すなわち養育者から認められている状態は自らを価値ある存在と見なしやすいため、自分の存在や能力に自信を持つことが可能となる。したがって「挑戦」「楽しさ」という有能感への追求に関する動機づけが高まったと考えられる。

更に、統制低群の児童は高群の児童に比べ、「因果律」「達成」「帰属」という内発的動機づけ傾向が強いことが示された。このことは、養育者により強

い統制を受けた児童ほど、内発的動機づけの傾向は低くなる事を示している。その理由として、養育者からの統制が多いことで、桜井 (1984a) や碓井 (1992) などで内発的動機づけを支えているもの一つとされる、自己決定感を育てることができなかったのだと推測できる。自己決定感とは「自分のことは自分で決めているんだ」といった気持ちであり、桜井 (1984) の SEM モデルの制御的側面の感情部分に位置している。この自己決定感は統制が強い状態では、自分のことを自分で決定する場面が提供されにくく育ちにくい。そのため、自らの行動を自分の意思で行っている傾向である「因果律の所在」、課題達成の楽しさを課題自体に示す傾向である「帰属」は低くなったと考えられる。また、過度の統制はかますぎも意味し、独力で課題を解くことが難しく、「達成」が低くなったのではないだろうか。

男子における養育態度と内発的動機づけの関係

次に男子は、「達成」において「愛情」の主効果がみられ、愛情低群の児童が愛情高群の児童よりも内発的動機づけ傾向が強いことが示された。このことは、拒否的な養育態度と内発的動機づけに負の相関を示した桜井 (1988) の結果とは異なるものであった。この理由として、時代の流れによる養育態度の変容が挙げられる。近年、養育者による子どもへのかま過ぎによる悪影響が指摘されているように (岸田, 2002)、養育者と子どもの関係は変容している。養育者が過度に子どもに関わることは、子どもが課題に取り組む際の手助け量を増加させる。そのため、愛情の高い児童、すなわち課題を行うにあたって養育者から手助けを多く受ける児童は、課題の遂行にあたって、独力で課題を達成するという動機づけが低くなったのではないだろうか。したがって、過保護の問題が強く指摘される近年のデータを使用した本研究と、桜井 (1988) の研究結果の間に異なる結果がみられたと考えられる。この結果によって、現代の過保護による動機づけへの悪影響を示唆したといえる。しかし、男子の愛情の高低における「愛情」と「達成」の相関係数を算出したとこ

る、愛情低群においては正の相関がみられ、「愛情」が高まるほど「達成」が高まることが示された。したがって、「愛情」の高さに比例し「達成」が低下するのではなく、愛情の与えすぎといった過度の養育が動機づけの低下に影響を与えていると考えることが妥当であろう。すなわち、「達成」においては「ほどよい愛情」が効果的であることといえる。

そして、「楽しさ」において、「愛情」の主効果がみられ、愛情高群は低群に比べ「楽しさ」が高い、すなわち課題自体に対して楽しさを感じていることが示された。また、統制高群において、愛情の高低間に有意な単純主効果が示された。統制の高い状態、すなわち子どもの行動に対して養育者が強い制約を掛けてしまう状態は、子どもの内発的動機づけによる行動に対しても制限を加える可能性が高く、自己決定感を育てにくいことから、内発的動機づけを低下させる状態といえる。この状態において更に愛情が少ない場合は、児童は自己決定感も有能感も認められないため、動機づけ傾向は更に低くなるのだと考えられる。更に、桜井（1987）の研究において、ほめることだけでなく、時には叱ることも内発的動機づけに重要であることが指摘されるように、高統制状態において、愛情が与えられる場合は、統制による叱りと、愛情によるほめの双方が与えられる状態も意味することから、内発的動機づけが高くなったのではないだろうか。

養育態度と内発的動機づけの関係の性差について

最後に性差について考察する。本研究においては、内発的動機づけと養育態度の分散分析の結果も、内発的動機づけと養育態度の相関係数を算出した場合も、女子は男子に比べ関係が強くみられた。この理由として社会的望ましさの影響が想定できる。桜井（1984b）によれば、児童の社会的望ましさに対する反応は、女子の場合は、男子に比べ周囲の大人からの干渉の期間が長いと、年齢とともに増大する傾向があると報告されている。したがって、女子において養育態度、内発的動機づけともに社会的望ましさの影響が強くみられたため双方の関係が強くなったとも考えることが出来る。次に本研究の手続

の影響も考えられる。本研究では養育態度の評定に「あなたの生活の世話を一番してくれる家の人は誰ですか？」という質問をし、その人物に関して質問に答えてもらった。その結果、一番世話をしてくれる人という質問に対して母親をイメージする児童が多くなる。したがって、女子の場合は同性である母親を同一視したため影響が強くみられたと予測できる。

まとめ

本研究は桜井（1988）の研究を基に、変わりゆく親子関係に伴って、内発的動機づけと養育態度の関係を再度検討することを目的とした。結果、大方桜井（1988）の結果を支持するものとなり、動機づけと養育態度の関係が示された。具体的には、高い愛情、低い統制の養育態度は内発的動機づけの高さと関係していることが示された。その上、新たな知見として愛情の高さが、内発的動機づけの下位尺度である「達成」に悪影響を与える可能性も示唆された。よって、親子関係の変化に伴って愛情の高さが一概に内発的動機づけに良い影響を与えていないことが示された。

引用文献

- Deci, E.L. (1975) *Intrinsic motivation*. New York: Plenum Press. (安藤延男・石田梅男(訳) (1980) 内発的動機づけ・実験心理学的アプローチ 誠信書房)
- 藤崎真知代. (1993) 親子関係はどう変わっているか、どう変わっていくのか. *児童心理*, 47, (12), 26-33.
- 鹿毛雅治. (1994) 内発的動機づけ研究の展望. *教育心理学研究*, 42, 345-359.
- 岸田優代. (2002). 過干渉の親にどう対応するか (特集 過干渉の親・放任の親). *児童心理*, 56, 1262-1266.
- 国立社会保障・人口問題研究所. (2005) 子ども数についての考え方. 第13回出生動向基本調査.
- 桜井茂男. (1984a) 内発的動機づけに及ぼす言語的報酬と物質的報酬の影響の比較. *教育心理学研究*, 31, 286-295.
- 桜井茂男. (1984b) 児童の社会的望ましさ測定尺度 (SDSC) の作成. *教育心理学研究*, 32, 310-314.
- 桜井茂男. (1987) 両親および教師の賞賛・叱責が児童

- の内発的動機づけに及ぼす影響. *奈良教育大学紀要*, 36, 173-182.
- 桜井茂男. (1988) 内発的動機づけに及ぼす養育態度の影響. *奈良教育大学教育研究所紀要*, 24, 77-82.
- 桜井茂男. (1990) 内発的動機づけのメカニズム. 風間書房.
- 桜井茂男. (1997) 学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる—. 誠信書房.
- 桜井茂男・高野清純. (1985) 内発的—外発的動機づけ測定尺度の開発. *筑波大学心理学研究*, 7, 43-54.
- 鈴木真雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦. (1985) 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成. *愛知教育大学研究報告, 教育科学*, 34, 139-152.
- 豊田秀樹. (1998) 共分散構造分析入門編—構造方程式モデリング—. 朝倉書店.
- 碓井真史. (1992) 内発的動機づけに及ぼす自己有能感と自己決定感の効果. *社会心理学研究*, 7, 85-91.
- Weiner, B. (1979) A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, 71, 3-25.
- Weiner, B. (2006) Social Motivation, Justice, and the Moral Emotions: An Attributional Approach. (速水敏彦・唐沢かおり (監訳) (2007). 社会的動機づけの心理学. 京都: 北大路書房)
- 1) 比治山大学 現代文化学部 社会臨床学科

抄 録

本研究では児童の内発的動機づけと、養育態度の関係を改めて検討し、現代における養育態度と子どもの自ら学ぶ意欲の関係を検討することを目的とした。調査対象者は、小学校5・6年生212名であった。結果、高い愛情、低い統制の養育態度は内発的動機づけの高さと関係していることが示され、先行研究を支持する結果であった。更に、新たな知見として愛情の高さが、内発的動機づけの下位尺度である「達成」に悪影響を与える可能性も示唆された。よって、愛情の高さが一概に内発的動機づけに良い影響を与えていないことが示された。

キーワード：内発的動機づけ 養育態度 愛情 統制